「ひとり旅の効能」（mamilin）

第１話

初めて金沢駅に着いたのは２００８年で、まだ駅員さんが改札に立っているのか、と随分驚いたのを覚えている。

当時の私は、就職して最初の配属先の大阪に住み始めて数年。千葉に住む学生時代からの彼氏と遠距離恋愛を続けていた。その彼氏と電話での口喧嘩をきっかけに連絡を取らなくなって２か月、いつもなら互いを行き来していたゴールデンウィークは、何も予定がなかった。連休前日に思い立って電車に乗り、天の橋立から日本海沿いに北上して、金沢駅までたどり着いたのは三日目の夜。

ほとんど予定を立てていなかった初めてのひとり旅は、当然金沢に対する予備知識もわずかで、元々聞いたことがあった兼六園とお城だった公園、それから前日に宿泊したインターネットカフェでたまたま見つけた武家屋敷の街並み、その程度だった。

翌日は、さっそく城跡と兼六園。兼六園では、藤棚の陰や小川沿いにむした苔に差し込む光、そういったものを一通り見てまわる。強い空腹を感じてたので、池に浮かぶお茶屋を見つけると、そこで親子丼のお昼をとった。窓際の席を確保し、のんびり穏やかな池を眺める。池に反射して差し込む光に明るい気持ちになり、とても素敵な場所を見つけられたことを喜んだ。たぶんこの旅の中で一番弾んだ気持ち。でも、あの彼と一緒に来てこの光景を教えたいのか、連れてきて一緒に楽しめるのか、そのときの私にはイメージができなかった。

それから坂を下って香林坊方面へ。左手には、やたらと人が集まる明るい場所があり、気にはなったものの、今の自分には突入できそうになく、そのまま武家屋敷街をうろつくことにした。

石畳の道の突き当りに、面白そうな店があり、覗いてみる。古い民家を改装したそのお店には、ところ狭しと並べられた九谷焼と小さなカフェスペース。

素敵な出会いはその店の奥にあった。明治時代に作られた赤絵の九谷焼ばかりを集めた小部屋。当時、ヨーロッパを中心に輸出されていたものを集めなおしたらしい。

細い細い赤と金の線が織り成す古い陶器は、近くで見ると緻密な絵や模様だが、離れて見ると赤から淡い夕陽色を経て白に至る柔らかいグラデーションの世界だった。美しい色。そのやさしく輝く世界に一瞬で魅了され、いつまでもその小部屋から出たくなかった。絶対また見に来よう、そう思った。

金沢駅まで戻る途中に尾山神社をぶらぶらしながら何を考えたのか覚えていない。ただひとり旅って楽しいなあ、またどっかひとりで行こう、そう感じたのはたしか。

第２話

その一年後の五月、九谷焼を見にまた石川へやってきた。疎遠になっていた初めての恋人とは、そのしばらく後、関係に正式なピリオドを打っていた。楽しく過ごすイメージが湧きにくくなってたとはいえ、何か辛いときに、思い浮かべる顔となまえ。自動的に思い浮かべてしまうたびに、違う違うと自身に言い聞かせ、そうしてようやく吹っ切れてきたところだった。

今回の旅は見たいものを入念に調べ、行きたい順番も決まっていた。

まずは、加賀温泉駅でレンタカーを借りて九谷焼美術館、そして九谷焼陶芸村へ。この一年の間に、九谷焼についてはいろいろ調べていて、赤絵の流れを継いだ現代の九谷作家を知り、彼の作品を見に行くのが一番の目的。

九谷焼美術館では、そもそも陶器がどう造られるのかから学び、窯の温度次第で発色が変わることを知って、古九谷の色をコントロールするのがいかに難しいかを思う。

念願の作品。遠目と近目で印象が全く変わる赤絵の特徴はそのままだが、均一な朱い線で描かれた美しい幾何学的な模様にアクセントの青。繊細な線のすべてが手描きで、他と比べてもなかなか手を出せない値段を見ながら、いつか部屋に飾れたら、いやいやその前に片付いた広い家に住まないと。そんな妄想もはかどる。ちなみに彼の作品は、今は買うことすら難しいらしい。

それ以外にも、細かい青いつぶつぶ突起に金色の優美な線でできた植物柄や、黄色や青やの不思議な光を放つグラデーション。色とりどりの繊細で美しい絵。好きになったきっかけは赤絵だけど、焼きものが見せる顔の広さとその魅力に出会うことができた。焼きものって、こんなに色々な表現ができるものなんだという大きな発見。

夜は金沢駅前のホテルに泊まった。前回気になっていたものの、勇気が出せず、一人で入れなかった金沢駅構内のおでん屋さんへ。おでんの湯気漂うカウンターで、隣り合った人とちょっと交わす会話は、当時まだ二十代半ばの小娘にとって、ちょっとした冒険だったことを覚えている。こういう小さな経験の積み重ねが、私を前向きにしてくれる。

翌日は美術館をふたつ。

大型連休を外しても人の多い二十一世紀美術館だが、不思議と落ち着く。ひとりなので、レアンドロプールを上から底から撮りあうことはなくても、なんとなく明るい光が差し込む美術館でのんびり見て回るだけで、楽しい気持ちになってくる。

そして、九谷焼がたっぷりあるという石川県立美術館。雉の夫婦に見とれ、大きな壺の繊細な絵にうっとりし、緑が見える大きな黒いソファでじんわり余韻を楽しむ。陶芸だけではなく、

漆芸や織物もすばらしい。さすが加賀百万石。豊かな財政は、豊かな芸術を生み、後世にも遺すことができる。そんな感想を持ちつつ、美しいものを好きなだけ見られる幸せに浸った。
　遠距離恋愛を続けたままだったら、交通費でお金に余裕もないし、時間も取れない。相手の興味にも合わせなければいけない。だからこんな旅はできなかっただろう。結婚したら自分が成長できなくなると思っていた当時の私にとって、別れたからこその楽しみだと感じていた。

　その後、友人たちと白山に登った帰りに金沢に寄り、寿司を食べ二十一世紀美術館で遊んだこともあった。ただそれ以降は転勤で大阪を離れ、金沢には行きにくくなってしまった。でもどこに住んでも、近くの焼き物の産地に興味を持ったり、陶芸をかじったりするようになったのは、九谷焼との出会いがきっかけだった。

第３話

　九谷焼に出会って１０年目、５か所目の勤務地、東京に戻ってきていた。
　定期的な転勤で落ち着いた関係を築くことができず、「独身だからいいでしょ」と次なる転勤を招いてしまう状況。そうやって流されるのもけっこう楽しい経験だけど、もう歳も歳だし、子どもも欲しいしと、ここらで落ち着くべく婚活とやらに手を出していた。そんな焦りを抱えつつ、相手への気持ちが良くわからないまま、この後どうしたいのかもわからないまま、誘われるままになんとなくデートを重ねていた男性がいた。
　あの頃、兼六園の雪吊りのライトアップ写真を見たのは、何がきっかけだったか。開業して３年の北陸新幹線には乗ったことがなく、気にはなっていた。更に、父から一眼レフカメラをお下がりでもらったばかりで、何か撮影しに行きたいとうずうずしていたタイミング。しかも次の三連休には大寒波が近づいてきているので雪がしっかり降るかもしれない。久々に赤絵も見たい。これは、行きたい！
　デート相手の彼から別の旅行のお誘いはあったが、「私は雪吊りを見たいから、金沢に行ってくるね！」と、ホテルだけ取ってそのまま新幹線で金沢に向かった。
　降りたのは、ものすごい人数の様々な国籍の人が行き来する、 高い天井で広い構内の駅。同じなのは駅名だけで、１０年前とはまるで違っていた。
　大ぶりのお寿司、雪の尾山神社、久しぶりの県立美術館。昔旅行した場所を懐かしみながら、夜を待つ。その間デート相手からは、「僕も仕事終わりに金沢に行きたい」という連絡があったが、「気を遣わず自由に行動したいのになあ」という思いが最初に浮かび、「好きに動きたいから、無理して来ないでね」とメッセージを返した。

夕方が近づいた頃、防寒対策にしっかり着こんでカメラを持ち、兼六園に向かう。薄明るかったあたりが暗くなるにつれ、園内の雰囲気が刻々と変わる。

返信が来ていて、もう新幹線に乗ったという。私はよく撮れた写真を一枚、返信代わりに送ると、「兼六園かあ」。場所がわかったらしい。それならいずれここに来るだろうと、景色に集中することにする。

雪吊りのビュースポットは無数にある。池の周囲をぐるぐる回ると、ライトアップされた樹々の見える角度が変わり、違う表情を見せる。皆好きな角度を探しながら撮るので、灯籠の周囲を除けば、一か所に人が集中するということがない。ゆっくり撮影を楽しめるのだ。

そのうちにも、少しずつ闇が深くなり、更にコントラストが増して、また雰囲気が変わる。そんな感じでまた別の写真を撮ることができ、気づけば池を何周もしていた。

彼もさすがにもう着いた頃では、と思ってからしばらく経つが、音信がない。この景色を見なければ、寒いなか金沢まで来た意味ないのになあと思う。城址にも遠征しつつ、閉園近くまで写真を撮り続けた。

あまりにも寒くお腹が減ったので、香林坊まで下りて一人で晩ごはんを食べられるところを探す。どこにも入りあぐねていると、古びた建物の一階にいかにもお酒が飲めそうな横丁があり、その中のとあるお店がとても気になった。繊細な格子戸にシンプルなのれん、メニューも出ていない。でも雰囲気が良さそう。この十年ですっかり身についた嗅覚と突撃精神。思いきって戸を開けてみると、カウンター６席のうち空席が１席だけ。

一人前ずつ繊細に盛り付けられたお料理はどれも美味しい。地元のお酒をいただくと、凍えた身体と気持ちが暖まる。少しずつ空間にも慣れて、他のお客さんに声をかけると、かなり前から予約して、このお店を目当てにわざわざ東京から名古屋から金沢まで来た方ばかり。たまたま一席だけ空いていたからの、素敵な出会い。ひとりでなければ出会えなかった。

２軒目のオススメまで教えてもらって、そのバーでさらに一杯。ようやく遅れて来た相手と落ち合って話す。合流しなかったのは、着いたら寒かったし、駅前で映画を見ていたと。とは言うものの多分私がそっけなくて連絡がなくて拗ねていたのだと感じた。取ったホテルも違っていたので、夜中に解散した。

翌日は特に連絡もないので、また一人であの赤絵の小部屋や茶屋街へ。人が多いいわゆる観光地を少し外れると静かな街並みが広がり、美味しそうなパンを買って、かじりながらゆっくり見て歩いた。しかし、何度行ってもあの小部屋には魅了されてしまう！

結局、向こうからは昼にはもう帰ると連絡が入った。一人が自由気ますぎて、合わせるほどの気持ちが湧かず、私からは連絡できなかった。人を放置してまでひとり旅をしてしまう申し訳なさと、結局はその人を受け入れられなかった申し訳なさ。罪悪感だらけになりながらも、茶屋街をまわり、骨董を見、カフェでコーヒーを飲んだり、夕方になって空いた近江町市場で

立ち飲みしたり、「のんびり金沢散歩」をしながら考え続けた。
　今回のことをきちんと謝り、でも期待に応えられない自分をちゃんと話そうと心に決めた。自分に気持ちがなければ関係を大事にできない、そういうことだ。

第４話

　ひとり旅に出るとき、見たいものや食べたいものではなくて、旅に出ること自体が本当の目的ということがままあると思う。そういうとき、ろくな調べも準備もせず、辛い想いや迷いに囚われたまま、逃げるかのように飛び立つ。行きの電車やバス、或いは飛行機では、そうした重い想いをしっかり抱え込み、新しい土地に着いてもまだなお、その想いは私にとどまっている。
　でも、新しい街を歩くうちに目新しい何かや知らなかった何かを見つけ、逃げたかった何かと少しずつ気持ちの距離を取り、落としもののように置いていく。そして、当時の写真を見て或いはまたその土地を訪れて、ふと当時の想いがよみがえる。
　気持ちの落としものの代わりには、新しいものに出会えた自分への自信を持つことができる。旅が終われば日常の想いはまた私につきまとうけど、旅で得たその自信は消えずに、私を前に進めてくれるような気がする。
　いつ行っても、ふらっと行っても、調べて行っても、新しい何かと出会える金沢は、つくづくひとり旅に向いている街だなぁと思う。また行くから、そのときはよろしくね。